

1 命を守る耐震化

阪神・淡路大震災では、多くの方が建物の倒壊などにより亡くなられています。
地震による被害から命を守るには、まず住宅などの耐震化を行うことが最優先となります。

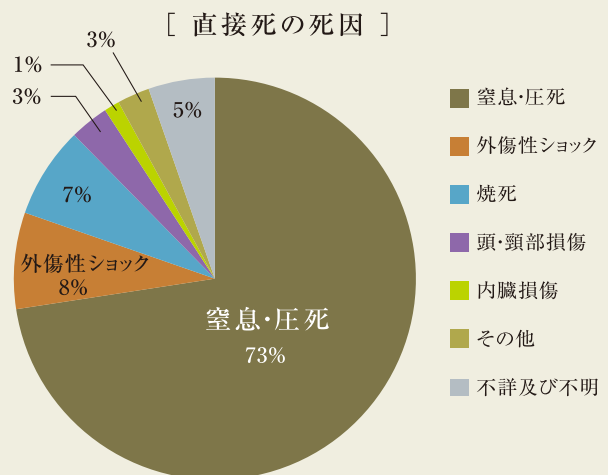


【倒壊した住宅の様子】1階部分が潰れるなどにより、多くの建物が全壊しました

主な死因の約7割は窒息・圧死

阪神・淡路大震災で亡くなった人の多くは、建築物や家具等の倒壊・転倒によって命を奪われています。兵庫県が震災10年を契機に取りまとめた調査では、県内の震災による死亡者の直接死の死因は、窒息・圧死が約73%、ついで外傷性ショックが約8%となっています。

建物の倒壊原因としては、木造の古い建物で老朽化が進んでいたことや、昭和56年以前の旧耐震基準で建てられていたことが挙げられています。



「兵庫県／阪神・淡路大震災の死者にかかる調査について
(平成17年12月22日記者発表)」をもとに作成



【ビルやマンションの被害の様子】1階部分が潰れて傾いた建物

鉄筋やコンクリートでできた建物も大きな被害を受けました



駅前のビルが崩壊した様子



中階が潰れ、上の階が大きく歪んだマンション

● まず必要なのは耐震診断！

震災による被害の軽減を図るには、建築物の耐震化を進めることが不可欠とされています。

建物の倒壊を防ぐことは命や財産を守るだけでなく、火災延焼の危険性の軽減や災害直後の救助活動の妨げを防ぐことにもつながります。

旧耐震基準で建てられている住宅などについては、まずは耐震診断を受け、必要があれば耐震改修を

行うといった対策が必要です。

また、耐震化されている場合でも、家具類等の転倒防止や家の中で避難の妨げになるものがないかといったことについて、普段から意識し備えておくことが必要です。

2 災害時に備えた備蓄

震災の時は水不足や交通網の寸断で物資が入りにくく、市民の暮らしの近いところに水、食料、生活必需品を備えることの大切さがあらためて認識されました。非常時に備えて家庭での備えをしておくことはとても大切です。



【給水を受ける市民と救援物資の配布の様子】
給水場所以外でも、水が出るところには行列ができました



多くの市民が物資の受け取りで並びました

電気・ガス・水道すべてが止まった

震災では、電気・ガス・上下水道・通信といったライフラインが大きな被害を受けましたが、中でも水不足は深刻な問題でした。

これまで全市的な断水の経験もなかったことから応急給水活動は多忙を極めました。自衛隊はじめ各市町村の給水車も応援に駆け付け、市内各所で給水の対応がなされました。

また、震災後、応急対策として、水と食料、寒い夜を過ごす毛布、医療品や生活必需品など、緊急を要する物資の手配と配送にも全力をあげました。しかし、最初のうちは配送範囲が広く、交通渋滞が配送の足を奪い、救援物資も滞りがちでした。



【買出しのために並ぶ人々】

食料や日用品の買い出しで、敷地の外にも行列ができました



【避難所の様子】 震災直後は多くの市民が避難所へ避難しました



配布された食料等



自衛隊による仮設のお風呂の設置

震災当時を振り返ると・・・

避難所や当時の日常生活での出来事を振り返ると次のようなことがありました。

- ・震災翌日の明け方、自衛隊のヘリコプターが水をようやく持ってきたので、長い行列に並んだ
- ・差し入れのおにぎりを手に入れるため長い時間並んだ
- ・避難所のトイレも水が出なかった
- ・固定電話が繋がらず、公衆電話がよくつながった
- ・夜は真っ暗になるので、何もできない
- ・水道管の破裂で湧き出した水をトイレの流し水に使った
- ・マンションの高層階まで階段で水を運んだ
- ・水が使えないので、食器はサランラップをまいて使用した
- ・宮水が湧き出ていたので助かった
- ・入浴のため、何度も尼崎や大阪まで出かけた
- ・知人や親戚の家に通ってお風呂に入った

● 災害に備えた 1週間程度の備蓄

震災の経験を生かして、市民の暮らしに近いところに備えるという考えのもと、現在は市内各所に物資の備蓄を行っています。

しかし、震災発生時は多数の方が避難してることが考えられます。そういったことから、各家庭で1週間程度の飲料水、食料、必要な日用品を備えておく必要があります。